

第12期東京都生涯学習審議会

第14回全体会

会議録

令和5年10月2日（月）

午後5時00分から午後6時52分まで

都庁第二本庁舎31階 特別会議室25

○出席委員

笹井 宏益 会長

志々田 まなみ 副会長

海老原 周子 委員

澤岡 詩野 委員

竹田 和広 委員

野口 晃菜 委員

広石 拓司 委員

松山 亜紀 委員

横田 美保 委員

第12期東京都生涯学習審議会 第14回全体会 会議次第

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 審議事項
 - 校内居場所カフェの魅力的運営について
- 3 今後の予定について
- 4 閉会

【配付資料】

資料 第12期東京都生涯学習審議会第14回全体会 審議資料

参考資料1 中高生の居場所 読売新聞オンライン

参考資料2 とうきょうの地域教育 No. 149

第12期東京都生涯学習審議会第14回全体会

令和5年10月2日（月）

開会：午後5時00分

【主任社会教育主事】 それでは、ただいまから第12期東京都生涯学習審議会第14回全体会を開催させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、福本委員におかれましては業務の都合で欠席となります。また、澤岡委員、野口委員、松山委員におかれましてはオンラインでの参加となります。本日はオンラインでの出席の委員もおりますので、ハイブリッド開催となります。

また、事務局に座っている人が全然いないのですけれども、本日緊急案件が生じたこともあり、地域教育支援部長、管理課長、統括指導主事は恐らく欠席という形になるかと思えます。また、生涯学習課長は公務で海外出張に出掛けており、欠席となりますので、今日は私一人が事務局で対応させていただくことになります。どうぞよろしくお願いいたします。

次に、配付資料の確認をさせていただきます。事前にもお送りしているかと思いますが、PDFの第14回審議資料でございます。オンラインで御参加の委員におかれましては事前に送付している資料を御覧いただけたらと思えます。

今日は校内居場所カフェについて議論したいと思っておりますが、お手元に参考資料で、一昨年、読売新聞で7回ほど連載されていた中高生の居場所〈1〉『『校内カフェ』で安らぐ高校生』から〈7〉までを参考資料として添付しております。PDFにも18ページ以降データとしても掲載させていただいておりますので、御確認いただけたらと思えます。

今日は傍聴希望者はおりませんので、そのまま始めたいと思えます。

では、これから笹井会長に進行をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

【笹井会長】 皆さん、こんにちは。お忙しい中御参加いただきまして、ありがとうございます。今日は久しぶりのハイブリッド開催で、どうぞ忌憚のない御意見をまた頂きたいと思えます。

先ほど事務局からも説明がありましたとおり、審議事項というのは1点ありまして、校内居場所カフェについてであります。居場所については、皆さん、これまでの議論の中でもいろいろ出てきましたし、実際にいろいろな現場で居場所の必要性や居場所に関わっている人たちとの交流といいたいでしょうか、そういう情報も得ているだろうと思いますが、校内居場所カフェ、学校の中のカフェというのはそうそうあるものではないのですが、今日はそのことについていろいろお話をお聞きして、かつ議論していきたいというふうに思っています。

それでは、事務局のほうから審議事項の御説明をお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】 では、私から審議資料の説明について行いたいと思います。

まず、今日は「校内居場所カフェの魅力的運営について」を審議事項にさせていただきたいのですが、前回、立川地区チャレンジスクール開設準備校長と担当教員2名が参加させていただいて、本来はそこに含めて議論をできたらと思ったのですが、おかげさまで議論が盛り上がり、校長も「大変良い刺激になりました。委員の方々によろしくお伝えください」というふうに伝え聞いております。校内居場所カフェにつきましても一緒にやれたらというのは、まだ正式に公表している形ではないのですが、令和7年度開校時に立川地区チャレンジスクールにも校内居場所カフェを開設しようという計画で今進めています。正式には令和6年度予算にのることになるかと思いますが、今のところ前回御説明した、スライドの3枚目になりますけれども、都立高校の魅力向上に向けた実行プログラムが本年3月に策定されて公表されています。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとあるのですが、そのⅡの「生徒目線に立った支援の充実」で、不登校・中途退学者支援の項目の(6)番において校内居場所カフェの設置が位置付けられています。スライドで言うと5枚目の一番上になります。この実施計画自体が令和4年から6年度までという実施計画なので、7年度以降もう一回再改定するときには校内居場所カフェを立川地区チャレンジスクールで実施していこうという考え方がのるわけですが、今公になっているのは、基本的には足立区に昨年度開設した都立小台橋高等学校で校内居場所カフェを東京都教育委員会として設置していこうという計画を持っているということでございます。今のところの計画ではその2校を想定しながら居場所カフェの設置に取り組んでいこうと考えております。

6枚目のスライドになります。今日お諮りしたい議題というのは「都立高校における『校内居場所カフェ』づくりをどのように進めていくか？」ということになります。

実際に第12期生涯学習審議会の中でこれをどう取り上げていくかということをお考え

のですが、7枚目のスライドは従来お見せしているものになります。

8枚目のスライドで少し丸を付けてみました。今回、第12期生涯学習審議会で取り上げる切り口としては、真ん中のパターンⅢからパターンⅤあたりの中身をどう深めていくか。新しい学校開放の形を考えていく。特に、お手元に「とうきょうの地域教育」が配られているかと思いますが、これは竹田委員のところにも協力いただいて実施している総合学科の社会人基礎力向上事業の最初の取組で、委員の方々に見に来ていただいたときの様子を紹介した記事になっています。都立世田谷総合高等学校においても都立王子総合高等学校においても、1年目の授業にしては随分良い形で進んできているかなと思っています。そういった意味で、今、開かれた学校の考え方の中にどんどんNPO等の社会資源が学校に入っていくって、学校の活動を盛り上げるとともに、高校生たちをインスパイアして、どんどん社会に関わってもらうような仕組みづくりを進めていきたい。そういった一環として、一つの総合学科の取組とは違った形で校内居場所カフェも位置付けてみたらどうだろうというのが事務局の基本的な考え方になります。

横のパターンⅣ、パターンⅤについては次回の審議会で少し議論したいと考えております。

9枚目のスライドから先行事例などを少し御紹介していきたいと思うのですが、元々は関西のほうで大阪府立西成高等学校が校内居場所カフェの始まりというふうにならば一般では言われています。正確なところはどうかよく分からないのですが、一般的にはそういう説明の仕方がなされています。関東は遅れること何年かたって、神奈川県立田奈高等学校で取組が始まったのが一番有名なのかな。新聞報道などによると、神奈川県では12校ほど既にカフェが設置されている学校があると言われていています。都立高等学校は、実はユースソーシャルワーカーという仕組みを入れたときに、私としては校内カフェというのは必須のアイテムだろうと思って平成28年のときから学校にいろいろな提案をしてきたのですが、なかなか御理解いただけなかった状況があります。それが令和元年度になるのかな、ようやく都立八王子拓真高等学校の先生方の実現したい形として校内居場所カフェをやりたいという声が上がったのを聞きつけて、それでは手伝わせてもらわないわけにはいかないだろうということで、校長先生に直談判に行き一緒にやらせてもらうことにしました。

実は前回ここに参加していた西村先生という男性の先生が居場所カフェをやりたいと言った発案者なのですね。当時のことを語ってみると、西村先生がおっしゃっていたのは、

最初は先生たちが運営するイメージを持っていらっしやった。教員の目が届くところの中で安心・安全な居場所をつくりたいという話をされていたのが最初でした。それは責任感の表れだと思うのですが、そこを頭から否定するのはよくない。どうやって説得しようかなと思っていたところ、ちょうど国立市の公民館が主催して、国立のNHK学園という通信制高校の会場で、先ほど紹介した大阪府立西成高等学校のとなりカフェを立ち上げて運営しているNPOの一般社団法人 office ドーナツトークの辻田さんという職員の方の講演会と一緒に聞きに行ったのですね。そうしたら、西村先生は学校の先生にしてはすごく物分かりが良いと思ってびっくりしたのですけれども、「ああ、あの話を聞いて分かりました。先生が関わってはいけない場所なんだ」とすっと言ってくれました。それを言ってほしかったという感じです。それでユースソーシャルワーカーに運営させてくれないかと頼んで、都立八王子拓真高等学校で取組を始めたのが都立高等学校の最初の取組です。

ただ、実施した年からすぐか、令和2年になるのかな、コロナになってしまって、学校に来ること自体にいろいろな制約が出てきた中での立ち上げだったものですから、コロナが明けるまでの間はいろいろな制約がある中で、マスク着用の下で、飲食などもできない中での交流の場を提供するような形で実施がなされてきた事例があります。これは今も好評で、そこにはユースソーシャルワーカーもふだんの相談担当は違うメンバーを送り込んでカフェの運営をしています。そういった動きに影響されて、私どもで把握しているところで言うと、都立荻窪高等学校や都立世田谷泉高等学校あたりでもカフェ的な動きを始めたいこうという取組がようやく都立高等学校の中にも芽生えてきたところがあります。

こちらで議論の素材ということで提供してみますと、ぴっかりカフェという神奈川県立田奈高等学校でやった取組は、図書館を開放するような形でやられているのが特徴です。しかもそこで飲食させることを許可しているところに特徴があったわけですね。そんなことができるようになった背景で一番大きかったのは、学校司書さんがその場を飲食もできる交流の場にしてみたいのではないかと提案をしたところがあると聞いています。元々は、司書室を使って——石井正宏さんが運営しているNPOパノラマが生徒の相談を始めるところに「私の部屋を使ってもいいですよ」というところから始まって、それが徐々にカフェに発展していったと聞いています。ぴっかりカフェの仕掛け人の一人である学校司書の松田さんのコメントをここで引用させていただきました。なぜカフェが学校という施設の中に求められるのかという意味を説明していただいているのかなと思うのですが、読み上げます。

「問題をこじらせる前に、子どもと仲良くなって、ガスを吐き出させてあげれば大丈夫な子もいっぱいいるわけです。予防的にガス抜きをしていたんですが、それ以上は何もできなかった。それが今は、カフェをつくることによって、「こういう子がいるんだけどとすぐ相談できる。子どもの事で何かあったときに、校内外の必要な大人につなげることができる。こういうしくみは、どの学校でも必要としていると思う。」。しかもそういった取組は「教師とつながっていないとできないです。一緒にやるために、先生方にもいっぱい来てほしいし、先生方も外部の支援者を使って仕事をやりやすくしてほしいです。どっちも子どもたちを支えるためなんです。」というコメントがあります。

実はこういったびっかりカフェの取組の中から交流相談——どちらかという面談というのは1対1でカウンセリングをするものだという固定観念みたいなのが学校関係者に根強くあるのですけれども、その一歩手前で、少しみんなで話しているうちに生徒の変化みたいなのを察知する。そういうことから個別に「どうしたの？」と声をかけていくことができるようになる。そういったところで交流相談という概念を松田さんと石井さんともう一人、臨床心理士の鈴木晶子さんという中心になってくれた方たちのほうで生み出したのかなと理解をしています。

次に、校内カフェの本家本元である大阪府立西成高等学校で立ち上げたドーナツトーク代表の田中さんという方は、校内居場所カフェの持つ力として、安全・安心な居場所、初期的なソーシャルワーク、文化の提供の三つを挙げています。「主として経済的下流層の家庭で見られる緊張状態（暴言－心理的虐待、親の不在－ネグレクト等がない空間は、生徒にとってはむしろ貴重なものです。緊張状態は」、ここは大事かなと思うのですけれども、ファースト・プレイスは家庭として、「セカンドプレイス（教室）でも生徒を襲い、その極端なものはいじめでしょうが、いじめでなくても、暴言が普通に飛び交うのが生徒にとってのセカンドプレイス＝教室です。それらから自由になれて『安全』な状態であることで、『安心』を生徒は得ることができます。安全と安心は、現在の主として下流層の子どもたちにとって、それほど貴重なことなのです。」という指摘をしています。

次に、今回の東京都で目指そうとしている校内居場所カフェのつくり方は、これまでの先行事例とは若干異なるところがございます。後でもまた説明をしていくこととなりますが、それをユースソーシャルワーカーの機能として——ユースソーシャルワーカーだけで回せるとは思っていないのですけれども、中心になって回せるような取組を進めていきたいと。これ（12ページ）は、実は平成28年度に私どもで描いたユースソーシャルワ

カーの事業の展開パターンです。今まではパターンⅠ、パターンⅡに集中していたのですけれども、ようやく三つ目の段階に取組を入れることができるかなというところまで来ています。できることなら、前期の第11期生涯学習審議会でも議論しましたが、学校外でも若者の自立を支援する場、そこに関わるユースワーカーなどと連携しながら若者たちを支える仕組みをつくりたいということを展望していますが、現在のところようやくⅢ段階まで来たのかなと思っています。

次に、これ（13ページ）はおさらいの意味を込めて紹介しましたが、第11期生涯学習審議会の建議の中でも結構いろいろな形で議論させていただいて、その中で注目された概念で、新成人期という捉え方が発達心理学のほうでは出てきているのだということを紹介させていただいています。いわば青年期と成人期の間に生じつつあり、いずれの時期とも異なる特徴を持つ10代後半から20代の時期で、この囲みで①から⑤まで挙げたような特徴を持つ若者たちにどういうアプローチをしていくのか。そこを考えた、そういった発達段階なども踏まえた支援が必要なのではないかと考えた上で、14枚目に行きますけれども、ターゲット・アプローチとユニバーサル・アプローチの視点を第11期生涯学習審議会では整理しました。

基本的には、左側にある現在の若者支援の主流となるアプローチがターゲット型アプローチになるだろうと言われています。ユースソーシャルワーカーの仕組みもターゲット型アプローチに依拠しながらつくってきたのは事実なのですが、やはりそういったものだけでアプローチを続けていくことではなくて、もっとそういったものを下支えするような、全ての若者たちを対象としたユニバーサル型アプローチを基盤としてきちんと、土台としてつくっていくことがこれまでの施策の中で見過ごされてきたのではないかという認識の下に、ユニバーサル型アプローチをどう展開していくかという問題意識を持ってこれからの青少年教育施策を充実させていこうと考えてきました。その手法としてユースワークという手法がとても重要なのではないかとことを第11期生涯学習審議会では指摘をしたということですね。

いわば学校における校内居場所カフェというのは、校内におけるサード・プレイスをつくり、こういったユニバーサル型アプローチの発想を盛り込みながら展開していくことが重要なのではないかと考えております。そういった取組をこれからどうやって展開していくか。取りあえずは先ほど紹介しました新しくできるチャレンジスクール2校での展開にとどまっておりますが、こういった取組は、チャレンジスクールのみに必要なだというもの

ではないはずなので、もう少し広くそういった議論を展開させていくようなことが本来必要なのではないかと考えて、15枚目のスライドに行きましたが、ユースソーシャルワーカーの役割としてサード・プレイスの設置を新たに位置付けることを考えていくとともに、具体的にどのようなことをやるかというのが16枚目のスライドになります。これまでの校内居場所カフェの取組の課題を踏まえて東京都が進めていく新しい校内場所カフェの考え方を整理しようということで、比較する図をここに描いてみたわけです。

従来の校内居場所カフェは、運営主体が主にNPOや、横浜市だと公益財団法人よこはまユース（旧・財団法人横浜市青少年育成協会）などが担っています。NPOのスタッフだからこそ良い取組ができるという評価も確かに頂いているし、確かに行政職員ではないからこそできることがあるのですが、一番の問題は、行政的なバックアップの仕組みが十分担保されていないことです。どちらかというと、学校とその団体とが話を合わせてうまく一致したときに事業が回っていく仕組みなのですが、これは神奈川県立田奈高等学校の話聞いても、大阪府立西成高等学校などで田中さんがどういうふうやってきたかという歴史を聞いたら、結局、冬の時代を経験しているのです。簡単に言うと、学校長が替わって教育方針が変わった途端にそういったカフェを否定し出すようなことがどこでも起こっている。

いわば学校長や教員の意識により位置付けが変化してしまうという不安定さをどう解消するかというのが一つの大きなテーマであります。そういった意味では、行政がきちんと計画上位置付けて、なおかつ、運営主体を学校に委ねない形で——将来的には学校の中の機能として組み込まれてしかなるべきというふうになっていくのだったら少し役割が変わってもいいのかなとは思いますが、当座は移行期だと考えると、やはり行政の計画にきちんと位置付けて予算も確保して、いわゆる教員系でないセクションがそういった活動を担うことに意味があるのではないかとということで、生涯学習課、ユースソーシャルワーカーを中心に今後の居場所カフェの展開を考えていきたいというふうに思っています。

下のほうに、「東京都教育委員会の施策（予算の確保を含む）として実施する。運営は、生涯学習課の職員であるYSWが担う」と。基本的には常駐させようと考えています。③としては、「今後の都立高校改革を考える上でのモデル施策的位置付けをもつ。」としていますが、当座は計画上内々に認められているものを含めて2校であるのですが、これをどう広げていくかというのが非常に大きな課題かと思っています。

居場所カフェにおいてはどんなやり方をするかということになりますけれども、ユース

ソーシャルワーカーが日常生活の中に入り込み、生徒との関係性を構築することで生徒が抱える課題を把握して、課題が顕在化する前に課題解決を図る。いわば未然防止のモデルに転換していきたい。それとともに、生徒自身が課題解決を図る主体として成長するように支援する。正に社会教育の視点ですけれども、ただの支援対象として位置付けるわけではなくて、自分自身や仲間とともに課題を解決していく。主体として成長するような支援をその場の中でどういうふうにやっていくかという形で考えていく。

資料では十分言及されていないのですが、先ほども申したように、ユースソーシャルワーカーを配置するだけで事足りるとは思っていないので、NPOや地域の団体や外部の団体をどうカフェに巻き込んで、いろいろなロールモデルと生徒たちが出会う場をつくれるかということを考えながら事業を展開していきたいと考えているところです。

現時点での校内居場所づくりについて東京都のほうで進めていきたいという考え方は以上です。

その次の資料からは、先ほど言いましたように、参考までに読売新聞が居場所カフェについて連載した資料も添付してありますので、是非ここに書かれてあることも含めて様々な角度から御意見を頂けたらというのが本日のお願いでございます。

私からは以上です。よろしく願いいたします。

【笹井会長】 どうもありがとうございました。

校内居場所カフェの事例を基にお話しいただきましたけれども、まず初めに、何か御質問などありましたら。特に事実関係等につきまして御質問などありましたら、そこから頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。どなたからでも結構です。

【横田委員】 今運営されている校内居場所カフェというのは、予算は付いているものなのでしょうか。

【主任社会教育主事】 今運営されているのは一切付いていないです。校内経費で回していただいています。

【横田委員】 学校が負担していると。

【主任社会教育主事】 ユースソーシャルワーカーが担当している場合は、その経費はもちろんうちの経費で出ますけれども、あといろいろなものを買ったりする経費など、そんなにお金をかけていないので、基本的には学校の運営費の中で賄っている状況です。

【横田委員】 そのユースソーシャルワーカーは各校1人配置されていて、その配置されている人がやっていると。

【主任社会教育主事】 実際に都立八王子拓真高等学校にはカフェ用に4人、週2回ですけれども、2人ずつは付けて対応するようにしています。それ以外に相談職員は別に置いているので。

【横田委員】 トータルで5人ということですか。

【主任社会教育主事】 トータル5人どころではないです。7人投入しています。特別対応みたいな形です。カフェを、我々としては事業を進めながら、そういう発想というのですか、どうしてもユースソーシャルワーカーはスクールソーシャルワーカーの延長だと考える節が学校にはある。その前に、いろいろな課題を発見して、そこで先生方と一緒に対応できる仕組みにつくり変えたいというのが開設当初からの我々の狙いなのだけれども、学校は、どちらかというと、ここまでは教員の役割、自分たちで面倒を見れなかったから福祉の専門職に任せたいみたいにぱっと関係を切ろうとするのですよ。そこが一番の問題だろうと思って、問題が顕在化してからの対応というのは相当労力がかかりますけれども、成果として得られるものが正直言ってそんなに多くはないですよ。

なので、問題が顕在化する前の状態で校内でその生徒を包み込む、包摂するという発想を持って関わっていくやり方に転換しないと。実は継続派遣校とって週2回や3回、都立八王子拓真高等学校の場合は週4回送っています。そういう学校運営の形にしていかないと、いつまでたってもいろいろな問題が噴き続けるだろうという問題意識は持っているということです。

【横田委員】 7名ということですからかなり人数が多くて、それを多くの学校でやろうとした場合に予算的に現実的なのかなと思いました。

【主任社会教育主事】 要するに、どこまでどういうふうなステップで展開していくか。まず最初に成功モデルをきちんとつくらないと、学校というのは、外から何か言われるよりも、内側で似たようなタイプの学校が改革を始めると、横を見て、あそこができるのだったらと、そういう情報を一番信じる傾向があるのですね。そういった意味では、まずは成功事例を見せていくことに今の段階は注力していく必要があるかなという問題意識です。その先は、当然、全部そこまで人の配置が必要だというふうに社会的なコンセンサスができればそれはそれにこしたことはないですし、まずはできるところから成功事例を幾つかつくっていったって、なおかつ違うタイプの学校で展開していくことで効果を見せていけたらというやり方なのかなと考えてやっています。

【横田委員】 もう1点、ユースソーシャルワーカーの配置は都立高等学校だと何パー

セントぐらいですか。

【主任社会教育主事】 ごめんなさい。パーセンテージはすぐ出ないですけども、今は基本的には継続派遣校と要請派遣校。一応、全都立学校が対象だというのが建前なのですね。ただ、すみません、定義上の話なので、不登校や中途退学の問題が顕著に現れていると東京都教育委員会が認める学校を継続派遣校という形で指定するのです。それは今40校52課程。全定併置校というのがあって、昼間の学校と夜間定時制を併せ持つ高等学校で、40校のうち12校ぐらいはダブってあるということです。そこに定期的に配置はしている。ただ、夜間定時制だと生徒の数が激減しているので、ユースソーシャルワーカーは週に1回1人というところから、生涯学習課の目指すものに対して共感してくれる学校にはその取組を支援しようということで、毎年シフトを替えながら対応しているのが現状です。

【澤岡委員】 2点御質問させていただきたいのですが、まず神奈川県立田奈高等学校というのは自分の地元なので、田奈高校でそんな先進的なことが行われていたと地域の人たちはほとんど知らないというのは少しびっくりしたのです。16枚目で、これまでの居場所カフェ、これからの姿ということで整理をさせていただいていたと思います。一つのコーディネーター的な役割をやるのが現段階ではNPOのスタッフだとあるのですが、これは、子供たちから聞こえてくることで、個人情報やセンシティブな情報を扱うこともすごくあるのかなと思うのです。現段階でNPOのスタッフやそういうところが居場所カフェの部分を担当しているときに、個人情報の扱いなどは今までどうされてきたのかなというのが1点目。

2点目で、大阪の居場所カフェの方なのか分からないのですが、以前に伺ったときに、子供たち、学生たちにとっての居場所というのも一つですが、子供たちがいないときに実は先生方もふらっとコーヒーを飲みに来て、先生方もある意味、同じ教員同士では話せないようなことを少しぼやいていく、つぶやいていく時間にもなっているというお話をどこかで聞いた気がするのです。ほかの居場所カフェでも先生にとっての居場所みたいな話にもなっているのかなというところを教えていただけたらと思いました。ありがとうございました。

【主任社会教育主事】 ありがとうございます。1点目の個人情報の話に関しては、当然NPOも守秘義務をかけて表には出さないようにしながら対応していると思いますけれども、そんなに厳密なルールを適用してやっている形には多分なっていないと思います。

それも、我々のやるときにはその辺をきちんとユースソーシャルワーカーに把握させて管理させていくことも重要な点かなとも思って、少し違うやり方を模索したいと思っているということです。

澤岡委員の話でも、神奈川県立田奈高等学校は地域でもそんなに知られていないというのは正にそうかもしれないですね。駅前のマクドナルドなどはいまだに出入り禁止ですかね。私が行ったときには田奈高校の生徒は出入り禁止という札が出ていた。マクドナルドへ入ってはいけないというのもありました。

大阪のほうの先生方にとってもくつろげる空間をというのは、副次的にそうなっている空間が先生たちにとっても必要だという意味合いなのだと思いますが、神奈川県のところまではよく分からないですけれども、東京都で今やっているところはまだそこまではいっていないとは思いますが。ただ、都立八王子拓真高等学校の話聞いていて、あまりカフェに御熱心ではないと思われた先生の発言などでも、カフェがあることによって生徒への対応がものすごくやりやすくなったと言ってくれた先生がいます。なぜなら、何が悪いと教員としては注意したいことがある。ぴつとやられてどこへ行かれてしまうか分からないと心配だけれども、この子はきっとカフェに行って愚痴るだろうということが見えてくると、逆に教員は自分の役割みたいなことをきちんと伝えることができるし、きちんと受け止めてくれる安心感があるのですごく助かっているという話は出ています。それはすごく良い効果だなと感じたことがあります。

本当は表向きに先生もくつろげる場所ですみたいなことはさすがに行政施策として言うのは難しいですけれども、副次的にはそういう場になっていくというか、なかなか先生というよろいを取って生徒と話すのも難しいとは思いますが、フラットに関われる空間みたいなものが本来ならば外にたくさんあるのがいいとは思いますが。くつろげる空間、安心できる空間を外につなげていくきっかけづくりの場としても校内カフェというのは意味があるかなという理解をしています。

【澤岡委員】 神奈川県立田奈高等学校は、私が高校生だった頃、本当にうちのエリアではかなり悪い子たちがいっぱいいるところだったので、いまだにそういう残り香みたいなところもあるかなと思います。後の意見、ディスカッションのところでお伝えしようかと思っていたのですが、今やろうとされているモデルが高齢者業界、福祉の業界でも言われている社会的処方教育という場面でやられようとしているのかな。ユースソーシャルワーカー（YSW）の方は社会的処方、イギリスなどで言うリンクワーカーで、人と人、

それから地域と学生、いろいろなところのつなぎ手になる。ただ、それがボランティアやそういう方だと個人情報などいろいろなことを扱う中でなかなか壁も出てくる。イギリスなどのリンクワーカーというのは、医療職と一緒に組んで患者の心の痛みや社会に欠けている部分をどんどん再構築していく役割として、専門職として非常に活躍されている。教育という現場の中で先生と協働しながら社会的処方をしていこうというイメージなのかと、何となく今日伺って感じました。ありがとうございます。

【主任社会教育主事】 社会的処方という考え方は、西智弘さんというお医者さんが書かれた本なども私も読んだことがあるので、つながっている部分はあるというふうには思っています。そういう捉え方を見ていく、説明していくというのもありかなと思って聞いておりました。ありがとうございます。

【広石委員】 さっきのユースソーシャルワーカーが学校にいるときに、どういう立場でいるのか。例えば学校の運営スタッフの一部としているのか、それとも学校の運営とは別の独立したような存在でいるのか。例えばその人の意思決定は、ある意味で、今回だと東京都教育委員会が設置してその人が動くとする、上司は誰なのかということと言うと、もちろんいろいろなコミュニケーションはあるのでしようけれども、ある意味で東京都教育委員会の指示で動くことになるのか、校長などの指示で動くのか。そういう位置付け方はどういうふうになっているのかなと。

【主任社会教育主事】 今までの取組は、基本的には校長の理解を得た上で、窓口教員は置いているのですけれども、比較的自由に提案してやらせてもらっています。それが許される学校であるところが一番大きな特徴かと思います。これからはそんなにがつつ…。もちろん学校という場を借りて一定のスペースを確保させてもらうわけですね。実は立川地区チャレンジスクールでは設計の段階から、最初からは間に合わなかったのですけれども、途中からカフェをやるコモンスペースみたいなものや図書館の一部をそれに開放してくれる、ユースソーシャルワーカーを常駐させてくれる場をつくることから話が行っているのです。そういう意味において、実は前回来た石田校長たちも、カフェをつくれますという計画にはのった。海のものとも山のものとも分からないけれども、西村先生は都立八王子拓真高等学校で経験者だった。そういうのを見ながら自前でやろうと動きを起こしたのです。それは少しまずいと思って、いやいや、そうではなくて、今回の考え方というのは、学校の場合は借りるのだけれども、一定の都の施策として入れることを考えて動くので、基本的な差配から経費の確保から何から全部、生涯学習課のほうで持たせても

らうのが筋として考えているのですということで御納得いただいたのが現状です。

といいながら、学校の先生たちと関係性を崩してしまったら話にならないところもあるので、その辺は気を付けつつ、学校から一定離れた空間としての位置付けと、あとは生徒がささやいた情報が全部学校に伝わってしまったりすると、言い方は悪いけれども、ちくりマンの集まりみたいになってしまう。犯罪などに関わることはさすがに情報共有しないとまずいだろうと一個一個判断しながらやっていますけれども、生徒のつぶやきレベルのことを上手に受け止めていく。そういう意味では生徒との約束を一定守ってくれる関係性というのかな、そういうのはどう担保できるかが一つの課題と思いますね。少なくとも全部学校に筒抜けで、情報を流せばいい。将来的にはそうではない学校に変わっていったほしいという前提があるのですよ。ただ、過渡的な状況で言うと、教員の意識がまだまだそこまでついていないことを鑑みると、やはり一定独立した仕組みで回していくやり方を取ったほうがいいたろうというのが今のところの我々の考え方ではあります。

【広石委員】 あと1点、飲食について。前に話しましたが、飲食は結構大事なと思ってはいるのですけれども、今後、飲食についてはどういうふうを考えていく予定ですか。

【主任社会教育主事】 今まではコロナのことがあったのであまり積極的には提案もできなかったのです。ただ、今、都立小台橋高等学校では駄目と言う教員が何人か出てきていて、さて、どうしようかと悩んでいるのです。立川地区チャレンジスクールのほうはその辺の話も緩やかに考えていったほうがいいのかという話も出ているので、基本的にはどういうふうな位置付けでやるかは考えなければいけないと思うのですね。例えば横浜市立横浜総合高校などは、ユースソーシャルワーカーが事例として見に行ったりしているのですけれども、今はどちらかというと食の支援にもものすごく力を入れていて、御飯などをもらいに1,000人ぐらい集まってくるみたいな状態だという話があります。その辺の兼ね合いはどう考えるか。くつろげる場所である。なおかつ、ワールドカフェではないのですけれども、交流するための手段としてそういうものが必要であるというところまで最低限担保したい。プラス食の支援みたいな話になってきたときにそこはどう考えていくか。不必要だとは思っていないのですけれども、都立八王子拓真高等学校でも、先生の発案でフードバンクかどこかの社会福祉協議会と連携して、週に1回食の支援みたいなのは別でやっていたりしますから、その辺の整理は考えていかなければいけないと思います。食の支援に対して積極的にやるべきだと思っている教員と、そんなのは学校がやることではないのではないかという意見が割れているのは事実かなと思います。是非、後で御意見などを頂け

るとありがたい論点かと思います。

【志々田副会長】 社会教育をやっていると、口の中に入るものを公費で買うというのはものすごくハードルが高いのですよね。この場合、ぴっかりカフェはファンドを起こしたりしてやっているのは知っているのですけれども、どうやってやるつもりですか。コーヒーなのかどうか知らないけれども、そういうものも全部公費として、今学校は買って子供たちに食べさせたり飲ませたりしているのですか。

【主任社会教育主事】 学校は一切やっていないですね。副会長が言われたとおりで、特定の生徒しか享受できないものに対しては公費を払いませんと事務方にばったりやられるのが現状ですので、各校の努力で寄附をもらったりしながらやっているケースがあると聞きます。だから、我々のほうは少なくとも学校経費で出さない道を考えてはいます。ただ、まともに予算要求したらアウトになると思いますね。今は会議をやるのだって水代をいろいろ言われる時代になってきているので、その負担の考え方など、それが外部連携のときとどういうふうな性格分けをするか。学校でそういったものを受け入れて飲食をする。最低でもお茶が飲める。神奈川県立田奈高等学校は最低限みそ汁を飲ませるようなこともあるので、そういうことをどこで線引きするかというのは大事な事かかと思っています。

(地域教育支援部長入室)

【志々田副会長】 カフェというとコーヒー。コーヒーでなくてもいい、みそ汁でもいいですけども、何か飲むものと少し甘いものがあるって、それが心地よい空間をつくるというのがあるので、それを公の学校のデフォルトのシステムとして入れていくのはとてもハードルが高い。

【主任社会教育主事】 それは今の仕切りだと難しいと思います。

【志々田副会長】 カフェでいいのかなと思ったり。呼び名としてはカフェなのかもしれないけれども、カフェではない。その矛盾がずっとあったので、分かりました。やはり従来どおりの公費の考え方ですね。

【主任社会教育主事】 だから、その辺の線引きをしながら、先ほども言ったように、学校の中で食の支援を寄附で受けてやっているケースは幾つもあるので、そういったものをどういうふうにやっていくかという意味でも、外部連携みたいなものと場の仕切り。外部から支援を受ける形をどうつくっていくかということと、その場においてどう提供していくかということは整理しなければいけない課題だと思います。

【志々田副会長】 広島でも小学校の朝食を週に1回。地元カルビー株式会社がある

自治体なので、シリアルのかりかりを寄附してもらおう。企業は物を寄附してくれるだけなのです。地元のお母さんたちやボランティアグループが、森永乳業から牛乳をもらってきて、食べたい子は食べていいよみたいなことをやっているのです。だから、口に入るものは難しいのだろう。寄附しかないのかな。ただ、それは可能ではありますよね。持つてくる人をきちんとコーディネートすれば可能かなとは思いました。

【海老原委員】 その外部連携や地域連携という形で、飲食に関しては企業との連携などもあり得るのですか。

【主任社会教育主事】 もちろんそれは考えて、ありだなと思っています。地域団体もあれば、NPOもあれば。あとは、その場をつくってくれるスタッフ、斜めの関係と言われているような大学生あたり。チャレンジスクールや都立八王子拓真高等学校みたいな3部制の学校には相当効果が大きいみたいですね。

実はこの9月に大学出たてのユースソーシャルワーカーを1人入れたのです。通常のスクールソーシャルワーカーとして位置付けるとまだまだ経験不足で、一人立ちさせて動けるようなタイプの子ではないのですけれども、あえて通信制課程のカフェをやった交流できる場所など、都立八王子拓真高等学校は今、図書館も開放したカフェみたいなものも司書さんと一緒に始めているのですが、入れたら効果絶大だと先生が喜んでいました。だから、少し世代が上だけれども、言い方は悪いのですが、拓真高校の子と同じ匂いのする子だったりするので。今日会ってきましたけれども、本人もすごく生き生きしていました。相乗効果があって、最初は「家から遠いので行きたくない」と言われたのだけれども、「いやいや、そんなことを言わないで、あなたにとって一番良い場所だと思うよ」と。行ってくれたら、楽しそうに今行っているみたいです。

先生たちも、少し上の世代で同じような悩みを一定くぐり抜けた子というか。そのユースソーシャルワーカーも中学校不登校で、通信制の高等学校を出て大学へ入った子なので、そういう意味ではすごく距離感が詰められる。そういうスタッフが周りにいるのはすごく大事な要素だというか。今までのスクールソーシャルワーカーみたいな考え方だと、そういう人は受け入れてもらえないわけです。ただ、そうではなくて、ユースワーク的な関わりというか、生徒との関係性を考えると若いスタッフの果たす役割というのは、昔もそういう役割をした子がいたのですけれども、時たま生徒の側に、上に立つときがあるのです。それがすごく成長する。高校生ぐらいただとそういう関係性をつくるのはすごく大事なかなということもあります。

【海老原委員】 某コーヒーチェーンがCSRなどでユースを一つテーマに取り組みられているところなども。

【主任社会教育主事】 若者たちを集めてお店などでインターンシップしてもらいながら、その子たちにアイデアを考えてもらうみたいなのでしょう。

【笹井会長】 もしほかに御質問があれば、オンラインで参加の方もあればお願いしたいのですが、いかがですか。

【松山委員】 二つあります。

一つは、先ほど主任社会教育主事の回答の中に少し出ていたのですが、私の理解が不足しているのかもしれないです。先生の関わり方がまだ私は理解し切れていなくて、サード・プレイスとして生徒の心理的安全性を確保して、全て筒抜けというわけにはもちろんいかないとは思いつつ、未然防止などの観点から言うと、学校と何らか協力はしていかなければいけないという観点で、先生は公式もしくは非公式でどのような形で関わることになっているのか。生徒にそれがどのように伝わっているのかというのがよく分からなかったのを教えていただきたい。

2点目は、こういう場所があったとして、生徒たちが本当にそういう場としてきちんと使ってくれるために何か仕組みというか、どのように生徒に働きかけて、来てもらえるようにしているのか。工夫などはどのようにされているのかなという2点をお伺いできればと思いました。

【主任社会教育主事】 都立高等学校の現行の事例でよろしいですか。

【松山委員】 大丈夫です。

【主任社会教育主事】 そういう前提で話をさせていただきます。

1点目の先生の関わり方というのは、都立八王子拓真高等学校で言うと、ユースソーシャルワーカーの窓口になっている自立支援担当教員がいるのです。その方を基本的には窓口調整をしています。ですので、一日どういうことがあったのか、ある生徒が来てこういう行動をしましたという報告は基本的には入れています。微に入り細に入り出しているかどうかというのは状況によるとは思いますけれども、基本的に生徒との関わりの様子は全部その先生に伝えて学校と共有する。拓真高校というのは少しメンタル的に課題、バッググラウンドを持った子たちが多いので、実はそれが個別相談の入り口になっているケースもあるのです。そういう子がいたら個別の面談に持っていけるようにユースソーシャルワーカーが働きかけて、教育相談室に行って個別支援もするみたいなやり方をしている

のです。だから、そういうところで連携ができていたというのが今までのやり方ですし、基本形としては、そういう良い関係ができれば踏襲していきたいというか、今後もそういうやり方で、当然学校の生徒としてより良く育ってもらうことを考えていくには連携、協働という観点は基本は必要だと思います。

どうやって生徒に働きかけているかということによかったですか。

【松山委員】 そうですね。何かあったら、ふらっと行くというものでもないのかなと思ったりもして、実態も含めて。

【主任社会教育主事】 強制しないというのが前提なので、最初はものすごく少ない人数で始まりました。都立八王子拓真高等学校で随分話したのは、生徒の目に留まる場所でやる。これがまた夏は暑くて冬はとても寒い昇降口の近くのスペースなので、あまりよろしくないかな。最近では図書館を開放しようという話が司書さんから出てきて、図書館なら冷房があるところに行けるのです。ただ、教室が幾つかある校舎の端っこで誰も見えないところで運営する形は避けようということで、昇降口の近くにあるので、上履きに履き替えるときにみんなが通れる。そういう工夫かな。そんなに先生からは積極的に打ち出さずに、徐々に人が増えていくという感じですかね。

あとは、一つ問題になっているのは、3部制の学校なので放課後という概念がないのですね。実は、2部の子が夕方の時間に来ていて授業に出なかったらどうするのだ。本当は授業に出席しなければいけないだろう。そういう議論も最初はありました。ただ、幾つか取組を進めていくうちに、全く学校に来なかった子がカフェが楽しみで学校に来出して、ひたすら千羽鶴だけ折っていた子が二、三か月たったら教室に入れるようになったという報告が出てきたりするわけです。渡り鳥が一回羽を休めて、次のステップに行く。昔、湯浅誠が言った“溜め”という概念がありますけれども、そういう場として機能していくことの理解が教員にできてくると大分その辺も変わってきたかなと思います。逆に、その居場所に来てどういう取組をしていたかということは、その分、ユースソーシャルワーカーのほうで先生にお伝えして相互理解を図りながら、目標は高等学校を卒業してもらおうこと、社会との接点を見出して社会に一歩踏み出してもらおうことを目指したいので、一応そういう関係性でやっている形です。

神奈川県立田奈高等学校で面白いなと思ったのは、ひたすら廊下にゴレンジャーみたいに、田奈レンジャーというのですけれども、先生たちが青、赤、黄色、ピンク、緑の5種類のコスチュームを着て撮った写真を、何も書いてなくて、図書館へ行こうと書いてある

のがひたすら貼ってある。ああいうのも面白いなと思って見たことがあります。そういう工夫は大事かもしれないですね。「こういうのをやっているから行って見たらどうだ」と言ってしまうことがかえってその場所から生徒を遠ざけてしまう傾向はあるのかなと見てとれます。

【野口委員】　これまでNPO等がやってきたことの課題が、都がやることによって解決する部分もかなりあるのだなと推察しました。それ以外の部分で今課題となっていること、今の松山委員の質問にも似ているかもしれませんが、例えばこういうタイプの子は割と来やすいけれども、こういうタイプの子は居場所カフェだと少し来づらいなど、そういう課題がこれまであったのか。また、中退予防という形で書いてありましたけれども、すみません、聞き逃したかもしれないのですが、実際に予防として機能したのか。要は、ドロップアウトの割合、数が実際に減ったのかみたいなのところでもしあれば教えていただけたらと思います。お願いします。

【主任社会教育主事】　一つ目の質問は……。

【広石委員】　向いている子、向いていない子。

【主任社会教育主事】　それはいるとは思いますが。取りあえず学校の取組に入れさせてもらっているということなので、統計を取るところまではいっていないのですけれども、基本的に今までユースソーシャルワーカーを始めて学校教育相談体制で担ってきた子というのは個別面談を望む子なのですね。そこに寄りたがらない子をどうするかという課題があって、そういった意味で対象となる生徒を一定広げて、生徒層が広がってきたのかな。逆に、先ほども言いましたけれども、居場所カフェに来ることによって、必要に応じて個別面談につながっていく子も出てきてはいるところから見ると、これまでの1対1対応のモデルでは対応できなかった子をサポートできること。あとは、ドーナツトークの田中さんのコメントにもありますけれども、最初のソーシャルワークの入り口だという考え方もある。

今、発達に課題のある生徒たちもたくさん入ってきたり、軽度知的障害を持った子なども当たり前のように高等学校に入ってくる。インクルーシブ型で喜ばしいことではあるのですけれども、その辺の状況を見極めるみたいな機能は一定果たしていると思います。それをもう少し精緻化すればいいのかというのは難しいところはあるのですけれども、もっと意識的にできるような体制を学校とともにどうつくるかということがあります。ここにはあまり細かくは出していなかったのですけれども、ユースソーシャルワーカーを入れる

意味として、個に応じた支援という観点をもう一つ盛り込もうとは思っているのですね。というのは、入学段階から個へのアセスメントを、今、都立高等学校の場合はスクールカウンセラーの全員面談で一応フォローするみたいなことはやっているのですけれども、実は全然学校全体などで情報共有されていないケースが多いのです。そういった取りまとめ的なものや生徒の個別支援シートみたいなものを、チャレンジスクールや昼夜間定時制あたりはそういうものを盛り込んで、その子が持っている学校生活に対する適応がどこまでできるか。リスク因子みたいなものはある程度把握するような取組もユースソーシャルワーカーに任せたらどうかと今考えているのです。

【笹井会長】 時間も時間なので、これからは質疑応答も結構なのですが、幾つか論点が出てきたと思います。少しその辺を深める意見交換をしたいと思いますので、よろしくをお願いします。幾つか論点が出てきましたけれども、実際NPOを運営されている竹田委員の立場からどういうふうにお考えになりますか。

【竹田委員】 ありがとうございます。質問をしなかった理由として、いろいろなアイデアと意見があったので、意見のほうでいろいろと感じたのですけれども、こちらで話したいと思っていました。

まず、私として今論点に上がっていなかったところで上げたいと思っているのは、主任社会教育主事が最後のところで、東京都が目指す「校内居場所カフェ」の考え方の中で、生徒自身が課題解決を図る主体として成長するように支援する。いわゆる不登校支援であったり課題解決のものに加えて、そういうユニバーサル・アプローチにおける青少年育成の効果も入れたらいいのではないかというところにもものすごく私としても共感するところがあります。

というのも、例えば私の関わる高校生たち、特に総合学科で今関わっている中でも、本当はもっとこんな学びがしてみたい、本当はもっとこんな大人と会ってみたい、こんなことを相談したいという漠然とした欲求だったり、やる気というのは結構多くの子が持っている。でも、それを自分からネットで探して何か調べてみようという子はそんなに多くはないわけですが、それを少しつついてあげると、何かやってみようかな、もっと考えてみようかなということは起きるといふのをとてもいろいろなところで感じています。なので、正にチャレンジスクールだけでなく、いろいろな学校で居場所カフェみたいなものができるとすごく良いのだらうと思いました。

その上でさっきの名前としてカフェがいいのかという話で、私もそれは思うところでは

あります。カフェの良さというのは、無目的で集まれて、ふらっとみんなが集まってくる。その中で働きかけることによって、いろいろ声をこちらからかけてあげることによって、ふだん相談しないことを話すことができる。そこでいろいろな課題が見つかって、関係性も少しできるので、いなかったら相談しなかった子が、いることによって相談するように変わるといのが価値だと思うのです。

例えば、今私たちが総合学科でやらせていただいているところはカフェではないのですが、一つ部屋をお借りして、そこで自由に、私たちが毎週2回常駐しているいろいろな相談を受ける場所をつくっているのです。例えばイベントみたいなものを毎週開いて、いろいろな大学生がそこに来て話が聞けるよ、受験体験が聞けるよ、そういうことで接点をつくる。要は、何かテーマごとに人が集まってきて、そこで関係性をつくることで、個別相談しに来ないかもしれないけれども、イベントで来る。そこで接点をつくる。そういう子たちが少し時間を超えてふらっと、進路が近くなったときにまた相談しに来てくれる。そんなことが起きたというのが最近あった出来事でした。

なので、接点づくりというのは、もしかするとカフェという食べるものだけでなく、今までの彼らとしては出会えなかった人とどう出会えるようにするのか。イベント企画であったり、そういう集め方もあるのではないかな。いろいろ集め方のモデルはありそうだと聞きながら思っていました。私としてもチャレンジスクールモデルもあると思いますし、進学校モデルみたいなものもあるかもしれませんし、総合学科モデルもあるかもしれませんし、いろいろなモデルで未然に本音を引き出せる関係性をどうつくるのか。課題の把握ができる関係性をどうつくるのか。そこから個の成長支援へどうつなげていくのか。いろいろなモデルが検討できると面白そうというのは考えながら思っていました。

いろいろあるのですが、一旦これで。

【笹井会長】 カフェの在り方論というか、カフェ論ですね。いろいろなところにコミュニティカフェや何とかカフェができていますけれども、結局、自分を開放できる、ほっとできるというか、あるいは相手と対等な関係性をつくれるところがみそになるのではないかと思っています。そういう関係がないと、ユースソーシャルワーカーや学校の先生と対等な関係性を経験することがないとみんな本音を話さないから、未然防止もなかなか難しいのではないかと思うのですね。その辺について、校内居場所カフェであっても、カフェの魅力的運営と書いてありますけれども、カフェとしての魅力というか、子供たちを引き付けるような空間というか、時間、そういうものではないかなと思うのですけれども、

ほかの皆さんはどういうふうにお考えですか。

【志々田副会長】 ターゲット・アプローチとユニバーサル・アプローチはできることが全然違って、いわゆる未然防止でも危険因子の高いものはターゲット・アプローチに頼らざるを得ないので、あまりターゲット・アプローチみたいなのところに効きますよと言ってしまうのではなくて、ユニバーサル・アプローチのみんな来ていいし、みんなでいろいろなことできるよという可能性を残したもののほうがいいのかなと思って聞いていました。

そういう意味では、最近で言うに伴走型と言ったりするじゃないですか。先生ではない、もう一人の伴走者が自分の学校生活を支えてくれる。そういう意味でチューターみたいなやり方のほうが今言っているものにはよく効くのかな。ユースワークもチューター型のものがたくさんありますので、そういうほうがいいのかなと思って聞きました。

【広石委員】 そういった意味では、先ほどからお話を聞いていて、ドーナツトークの田中さんも書かれている感じの、今はファースト・プレイス、家族も学校もすごく緊張感を強いられるもので、昔だといろいろな交流ができた、例えば子供同士もぐだぐだしている時間や場所があった。そういった意味でのよりサード・プレイス的なものが必要なだけけれども、そういった場所にアクセスできない人が多い。そういう背景的な課題が多分あるのだと思うので、居場所カフェをやる理由は、ただ単に中退予防というよりは、ユニバーサル・アプローチ的な視点で言うならば、ユニバーサルなというか、今の子供たちの抱えている状況に対して、さっきお話があった愚痴れる場所。先生に怒られたけれども、愚痴る場所がない。それはそれだけ社会的なネットワークが弱まっている現状があるところがすごく大きなテーマかなと思うのですね。

今どき会社でも、昔だったら上司が部下を怒ったら、その夜飲みに行って、「実はおまえには期待しているんだよ」みたいなことを言えばよかったのだけれども、今は飲み会などもない時代だから、割と一回傷つくとそれで関係性が固定してしまうこともあるので、中間的なコミュニケーションみたいなものが実は今すごく社会的に足りないのではないかと。そういう意味でのまず居場所が要るのではないかと一つ思いました。

二つ目は、先ほどの回復過程というか、湯浅さんが“溜め”とおっしゃったこともありましたが、困っている状況や、もやもやした状況を早く解決するのではなくて、一回少しバッファ的な時間が要するということですね。千羽鶴だけ折りに来ていることによって何となく学校の空気になじんで、そこに行っても否定されない自分がいるから、こ

これは学校に行っても大丈夫かなみたいな感じの心理的な熟成というか、そういった時間が必要。その時間の意味みたいなことももう少し明確に書いてあげたほうが、副会長がおっしゃったターゲット・アプローチや問題解決型みたいに行き過ぎてしまうと、そういう部分がすごくいろいろな課題を解決するための基盤として必要なのだけれども、子供のソーシャル・ネットワークもすごく弱まっているし、間の回復過程に寄り添う。さっきの伴走型というか、寄り添ってくれる存在自体が今欠けているところも居場所カフェの重要な役割なのだというところ。そのあたりの理論的バックグラウンドみたいなものがあつたほうがぶれないし、先生方の理解も得られるのではないかなと今日の話聞いていて思っていたところです。

【主任社会教育主事】 関係性で解決するというかね。

【広石委員】 そうですね。そこが欠けているというかね。

【主任社会教育主事】 そういうところなのだと思いますよね。

【野口委員】 今の広石委員の御意見にすごくつながると思うのですがけれども、先生たちが居場所やカフェをどういうふう理解しているか、すごく重要だと思っています。それこそ主任社会教育主事がおっしゃったように、例えばリスク因子のアセスメントをしたり、個別的なアセスメントをしていったり、先生たちと情報共有をしていくとなったときに、先生たちが早く解決を急ぎ過ぎてしまったり、それで生徒に何か余計なことを言ってしまったたり、めっちゃありそうだと思います。「居場所カフェでこういうことを言ったのでしょ」みたいなことを言ってしまったたり、すごくありそうだなと思っています。その居場所カフェが単なる居場所だけではなくて、本音を話せるようにする場所。それは先生たちにはどうしても言えないこともあるよねということも前提として、ユースソーシャルワーカーの方たちは大丈夫だと思うのですがけれども、先生たちに伝達することと伝達してはいけないことも含めて整理しておけるといいなと思いました。

あと、先ほど広石委員がおっしゃったように、理念みたいなものをきちんと先生たちに理解してもらおう。解決を急ぎ過ぎないことの大事さ、そういったことを理解してもらおうのがすごく重要だなと思いました。

【澤岡委員】 全然専門でもないのですがけれども、生活支援コーディネーターさんたちのお話を思い起こしながら今伺わせていただいていたのですが、サロンや居場所と言われているところに来られる人はある意味まだ前に向けている人たちだったりです。よく最近言うのが、いわゆる居場所と我々がマネジメントしていない場所に種をまくことがとても

大切だねという話の中で、例えば移動販売みたいなところに買物を目的に来ているのだけれども、そこで顔見知りの関係性をつくっておいて、課題が出てきたところで「実はね」とつぶやけるような存在になっておくのがとても大切だよね。その関係性をつくる場というのが居場所という意味の効果だよねとお話を伺っていたのを思い出して聞いていました。そういう意味では、子供たちにとっても、「君たちの居場所だよ」と熱く言われると、言われれば言われるほど心が引いてしまう子もいっぱいいるのかな。その場で何かやる。さっきおっしゃっていたイベントをやる。だから行くのだよね。でも、それはその顔つなぎ、顔なじみの「実は」をつぶやける関係性を築くものだとすることを関わる人たちみんなが共有しておくことがとても大切なのかな。

もう一つ、今の子供たち、高齢者もみんなそうですけれども、今これだけ社会情勢が不安定な中で老いも若きもみんな誰もがリスクを抱えている。もしかしたら、今日は元気だと思っても明日はそこからドロップアウトしてしまう可能性のある人たちが世の中にたくさんいる中で、ある意味、セーフティーネットですよ。校内にある居場所カフェに顔なじみの誰かがいることが、自分がもし少しつらいときに、あの人につぶやけばいいのだとお守りになるような場でもあるという意味合いでも、予防や防止となるのか分からない、早期発見になるのかも分からないですけれども、未然に種をまいておくという意味合いが、これから正に社会情勢がどんどん不安定になっていく中では、居場所カフェの役割としても意味をなしていくのかな。そういうことも含めて、起きてしまったことだけではなくて、未然防止というか、深刻化する防止にもなるのだということに関わる先生方もみんな共有していくことがとても大切かなと改めて感じます。

【海老原委員】 私、この話を今日初めてお伺いして、是非、主任社会教育主事のおっしゃっていたいろいろなコンセプトをそのまま実現していただきたいと思いました。NPOではなくて、これを行政がやるということはすごく大きな意味があると私は思っています。日本のNPOの規模感を考慮するといった理由以上に、こういったユースワークだったり交流相談という、これまで学校の中では主流ではなく、端っことは言いませんが、NPOや理解のある方など外部が担ってきたものをきちんと学校の中で位置付けるというのはこれから絶対に必要だと思うのです。居場所と名乗るかどうかは、ほかの委員の方からおっしゃったように生徒が身構えてしまうかもしれないので、そこはこれから考えるなどあるかと思っています。ただ、カフェというものは、個人的には、ぜひ推し進めていただきたいと非常に強く思いました。飲み物とちょっとした軽食も含めて。

何でこんなに熱く語り始めたかといいますと、私が外国人の子たちを部活動という形で放課後の居場所づくりをしていたときに、お菓子を置いたりしていたのですけれども、そのうち、外国人の子たちだけではなくて、日本人のいろいろな困難を抱えたと言われる、発達障害がある子や中学校不登校だったり、家がかかなり不安定な子たちも来るようになりました。その背景一つが、何もイベントもせずに、ただただお菓子を食べながらしゃべるという空間をつくっていました。そうしたら、「僕もいい？」という感じで入ってくるようになった。その子たちが言っていた中で、すごく印象的だったのが、「ここは別に何もしなくても居てもいい」と言っていました。何かイベントがあるから来るのも大事です。と同時に、カフェみたいな、特に何も役割もないし、やることもないのだけれども、そこにいられるというのは、学校の中でいづらさを感じる子にとっては一つのバッファゾーンになると思います。なので、そういったところを実現することは本当にこれから、今私もユースソーシャルワーカーの研修を手伝わせていただいていますけれども、すごく大事なことになっていると思います。

いろいろ超えなければいけないステップはあると思いますけれども、本当に困っている子ほどワン・オン・ワンの面接などにつなげるのはすごく難しいと感じています。まだつなげられる子はいいのですよね。ふだんの雑談の中でぼろっと出てきて、そのぼろっとが実はすごく深刻なことだったりする。既にユースソーシャルワーカーで1対1の個別相談の仕組みがあるのに加えて、ユースワークなど、そういった場の中からつなげていくのは次のステップとしてもすごく大事なことですし、東京だけでなく全国にも欲しいなど。外国ルーツの子などは特にそうなのですけれども、日本社会とのつながりがないので、学校が最後のとりでになっている子も多いです。主任社会教育主事にすごくプレッシャーをかけるみたいになってしまいましたけれども、すごく意義深いことだと思いますので、是非進めてください。

【広石委員】 今の海老原委員のお話に重なるところで言うと、ユースソーシャルワーカーやユースワークというのはどうしても見えにくい存在だと思うのですね。どちらかというと困ったときに相談に行く人みたいな存在になってしまうと、すごく見えにくい。そうすると、なおさら奥にいる人じゃないですか。よく言われるみたいに、相談員に相談したら終わりではないけれども、そういうふうになってしまう。逆に、さっきの昇降口の手前でカフェをやっている存在となると一番表に出てくるので、そうすることによって、ある意味で、学校の先生にしても生徒たちにしても、すごくフロントに出てきている人だと

思うとアクセスしやすくなってくる。ユースソーシャルワーカーという存在をどういうふうに見える化するのか、意義をしっかりと伝えるのかという意味でもカフェというのはすごく必要なかと思いますね。よく保健室に相談に行くことができましたけれども、保健の先生は健康診断などで会っているから行きやすいと思うのです。会ったことがない人がいるところには行きにくいだけでも、何かの機会に会った、見たことがある人がいて、ああいう人なのだなと人柄などを見てアクセスが始まる場所があると思います。そういった意味では、ユースワークをどうやって社会的な概念として広げていくのか。第11期るときからすごく難しいなと思っていたのですけれども、カフェとして表に出てもらうことによって実は意味を先生や生徒が理解できることが促進できればいいなと思いました。

【笹井会長】 だから、何となく自然に集まってその人の顔を見る、話をするのができればいいわけで、その誘因、そのインセンティブとして飲み食いはとても大事だなと改めて思いましたね。

【横田委員】 海老原委員や皆さんがおっしゃっているみたいに、目的がなくてもふらっと立ち寄れる場所。何か深刻な悩みがあってから行くわけではなくて、日頃から何となく行けるような場所であったり、雑談をしたり、そういった関係性をつくれる場所が学校の中にある。居場所が先生以外、友達以外にもあり、しかもそれが第三者であることが非常に重要です。進路の悩みであったり家の悩みであったり、すごくいろいろな悩みがある中でそういった方がいる、心理的なよりどころがあるというのがすごく大切だと思っており、そのためソーシャルワーカーにはいろいろなスキルや知識などが必要になるのではと思います。やはりソーシャルワーカーだけでは担えない部分が多くあると思うので、外部の方とどうつながるのか。ネットワークであったりスキルであったり、人的にどれぐらいの人数がいれば学校全体をサポートできるのか。その辺の仕組みづくりが非常に重要になってくると思うので、それを行政がどう担うのかというのが鍵だと思います。

あと、ソーシャルワーカーが外につながる窓口というか、ハブになれるのだと今回のお話を聞いて思ったので、進路の悩みであればキャリア支援の外部組織につながる。深刻な家庭の事情があれば行政につなげるというように、ソーシャルワーカーがいろいろな方への橋渡しをし、学校と外へのつながりの窓口になり得ると思ったので、仕組み化するのは非常に重要だと思いました。

【笹井会長】 私も、地域学校協働活動や公民館の衰退の話など、実証的データはないのだけれども、経験をたどってみると、やたら教育機関を強調するのですね。教育機関な

のだから飲み食い駄目ですと。図書館だって蔦屋やスターバックスが入っていますよね。世界的にブームなのです。ほっとできるためにはコーヒーぐらい必要でしょうということだと思っただけけれども、独断かもしれないですが、それは教育機関の関係者には拒否反応があって、それを何とかしなければいけないのかなと改めて思いました。それは些細な話でもなくて、結構決定的に重要な話だろうと思いますね。

【志々田副会長】 チャレンジスクールという東京都の取組はすごく先を行っていて、広島だとフレキシブルスクールなど、みんながまねしていると思うのですが、チャレンジスクールのコンセプトというところに今言っているカフェの問題はあるような気がします。東京都で目指すチャレンジスクールの姿はどこが決めているのかなと思ったのですけれども、そこをすごく議論していくことによって実はうまく入っていくのかなと少し思ったのです。

【主任社会教育主事】 基本的な方針は、チャレンジスクール開設のときの検討委員会を組んで大枠は決めていくのです。私も最近知ったのですが、教育課程を編成したりなんなりするのは基本的には開設準備室でやっていくのです。今回、石田校長のところからゼロの段階から生涯学習課がかませてもらっていただくことで相当状況が変わっているかな。教育課程の編成権を考えれば校長に属するわけだから、ある程度の総合学科のチャレンジスクールの形の中で許容できるコンセプト、範囲を定めて、中身は学校の教員たちが作り込む。意外と学校長に任されているところは大きいのだなと私も最近実感したところで、それをゼロからつくる段階でいろいろ。

実は生涯学習審議会に出てもらおうと思ったのも、頭を軟らかくしてもらって、いろいろな味方が外にいることの安心感というのですか、やはり心理的な拒否感があるじゃないですか。外の人に関わると我々の立場に立ってくれない、面倒くさいというものを若干感じなくはなかったので、こういうところで話してもらうことで学校運営のバリエーションをつくってもらえるといいかなと思ったのです。事実、立川地区なので、NPO法人育て上げネットの理事長も併せて、要するに卒後も若者支援と連動させていく。市の資源を使うにはどうしたらいいか。月に1回定期的に意見交換をしようという場も設定してやっっていこうとしているのです。そういう意味で、社会資源を本当に生かして、安心して地域に出していける。

この間、私もまだ調べていないのですが、アルバイトを単位にすると校長が言い出していて、都立六本木高等学校でも先例があるというのです。教育課程にどうはまる

かというのは見ていかなければいけないのだけれども、実は高等学校教育というか、高校教育のレベルで言うと、教育課程は相当弾力的じゃないですか。そもそも学校外学修単位認定制度があるのだけれども、全然活用されていない。実は高校の74単位の36単位は、例えば漢字検定を取ったら国語の単位として認定していい、よその学校で受けた講義も認定できるなど、かなり柔軟な仕組みにはなっているのですね。さらに普通科改革でも、8月終わりに中央教育審議会がワーキンググループのまとめを出して、4月から変えると。そのときの単位の修得も、オンラインというか、双方向型のもので学習単位として認めていく方向で考えろと。相当枠組みが変わってきていて、そういったものを効果的に生かして、しかも教員側も安心できるというのかな。システムをつくっていくことで高校教育の構造を軟らかい構造に変えていく要素は散らばっているのですね。

あとはそれをどううまくコーディネートし、学校の仕組みの中に組み込めるかというのが大きな役割で、カフェというのはその一つの象徴的な外部との出入口というのですか。そのつなぎみたいなものが果たせるといいかな。立川地区チャレンジスクールの話だと、正面玄関を入ったところにぱっと開ける場所に開設できるような構想を持っていきたいみたいな話も出ています。それこそ実験で見せる。山本五十六ではないですけども、やってみせ。そういうことを積み重ねていく中でじわりじわりと認識を深めていって、高等学校の在り方を。98パーセント、ほぼ全入時代の高校教育の在り方みたいなことが考えられるといいかなとは思っているのです。

【志々田副会長】 ありがとうございます。そう思います。

【竹田委員】 以前の笹井会長のお話ですごく印象的なのは、学校というのは目的があって、その学校の目的以外のことはやりたくないと言われてしまう。それは本当に私もすごく、ハレーションを生む子がたまにいるなと思っています。昨日、総合的な探究の時間の相談みたいなことを受けるイベントがあったのですけれども、そこである子が言ったことが印象的に残っています。総合的な探究の時間は基本的に自分でいろいろ決めていける範囲があるとは思うのですけれども、「先生に言われたこと以外をやっていいんだというのに気づきました」と言って帰っていった子がいたのですね。当たり前だと私たちは思うのですけれども、その子にとっては結構な気づきだったみたいです。つまり、勉強や学校には目的があって、その目的のためにやらなければいけないことがあって、それしかやってはいけないと思い込んでいた子の脳をほぐすと、すごくその子の可能性が見えてくると感じました。

その話と重なって、先ほどの何もしなくても来ていい場所が学校にあるというのは結構な革命だと改めて思ったところがあります。不登校の子からしても、その学校の目的に合わないけれども学校という場所が好き。そんなはざまの子が行けるというのが、何もなくても来ていい場所なのだろうと聞きながら思ったところでした。

一方で、私も学校と関わる中で思うのが、とはいえ、校長が理解しないとやらせてもらえない。もっと言えば、学校の先生方が賛同してくれないと人も集まってこない。一步間違えればネガティブなうわささえ流される。何もしなくても来ていい場所なのに、先生から見たら、あそこは正に不登校の子だけ行く場所だと思うと、ぼろっと先生が授業等と言ってしまうとみんなの認知がそうになってしまう。生徒がどう見えるか、先生がどういう場所だと伝えるかというのは学校の中では結構大事だと思います。学校の先生方がその場の理解をきちんとしていただいて、きちんと生徒に伝えてくださる仕組みをどうつくるかは大事です。

そう思ったときに一つ大事かもしれないと思ったのは、ユースソーシャルワーカーの皆さんがやるというお話でしたけれども、学校の先生から見たときに、そこに向かうと何ができるのかということが今よりも多様に分かるようになると、多様な学校ができるようになるかもしれない。例えば不登校支援というイメージでやれば、不登校の多い学校は先生が楽になると思うからいいと言うかもしれません。例えば進路につなげる。今で言えば体験格差の話題等も最近広がってきて、総合的な探究の時間も広がっていて、いろいろ外部に経験させたい。インターン、ボランティアなどをさせたいと思うけれども、なかなかできないと困っている先生が増えているのであれば、そういうところとつなげられますよと言えるだけのYSWの方、もしくは使えるネットワークみたいなものを可視化される。先生からしても、目的がなくても行っていい場所なのだけれども、そこに行きさえすればいろいろな道につながっていく。そんな学校内認知が広げられると、より多くの学校でやってもいいかなと思っていただけのではなかろうか。

でも、そのバランスがすごく難しいと私もやっていると先生にそういうふうに言ってしまうと、そういう場所だよと生徒に言ってしまうと、結局目的がないと行ってはいけないことになる。実はこれが結構今私が悩んでいるポイントであって、この壁を越えられなくて現場として悩んでいるのはあります。私たちからすれば、ふらっと来ていいのですけれども、先生からすると、進路に迷っていないと行ってはいけないみたい。あそこは進路に悩みのある子が行く場所だと言われてしまうみたいなことをどう超えるかは壁だ

ぞと思いました。

【広石委員】 今の竹田委員の話でいったら、定義をはっきりさせて、先生に対する理解をきちんとする。さっき海老原委員もおっしゃったけれども、きちんと伝えるのはすごく大事なというのの一つ。

あと、さっき社会的処方という話もありましたけれども、バックアップできるネットワークといいですか、アクセス先をある程度組織立てて整えてあげる。今はまだ1校、2校だといいいのですけれども、今後増やしていくときには、こういうことだったらあそこに行けばいいみたいな感じの社会資源をある程度見える化してあげて、アクセスできることもすごく大事なのだろうな。そういうふうな動き方のトレーニングも要るのでしょうか。ステップ・バイ・ステップなのかもしれませんけれども。

あと、竹田委員がおっしゃったみたいに、目的というのはあまり持たないほうがいいのだけれども、ある程度ソーシャルワーカー側が受皿の幅をどれぐらい広げられるかというのは、別途こういうカフェ運営委員用の研修みたいな感じの何かが必要なのだろうと思いました。

【主任社会教育主事】 正にそうで、個にしか向かない人も少なからずいるのですね。そんなこともあるので、カフェ、こういうものが運営できそうな、自分でもそういうことを思考している、考えているソーシャルワーカーには実はNPO法人パノラマがやっている居場所カフェの研修会に行かせたりしています。基礎編と応用編みたいなのがあったのかな。いろいろな地区の状況、学校の見学なども行きたいというので、この間は横浜市立横浜総合高校と川崎市立高津高校の定時制などへ行って見て、今自分が置かれている現場と。要するに、あまりこちらのほうで指図することではなくて、ユースソーシャルワーカーの中の内発的な動機付けというのか。どういう方向で行くのか見定めながら、最終的には誰をどこに配置するかというのは我々のほうで考えていくとはいえ、カフェを設置する学校とうちが決めた学校ではなくても、そういうアプローチは必要だという認識を持ってもらえるのが重要なと思っています。10人ぐらい希望して行ってきていますね。

どのレベルを見てもそうなのですけれども、さっき野口委員が言った早く解決を急ぎ過ぎるのはよくないということと、竹田委員が言ってくれて私も書きましたが、生徒自身が課題解決を図る主体としての成長。それは実は時間がかかるけれども、自己決定する力は結構高校生は持っていると思うのですね。そこの部分の“溜め”もそうだし、待つという概念も必要です。いろいろな高校生を見てきましたけれども、自分で決定したものに対し

ては責任を持ちますよね。誰かにやらされたものではないというのは、信頼してもいいところだなということは我々も経験上実感しているのです。

昔、ジョブシャドウイングをやっていて、最初の年に100人集められるかとNPOの人に言われて、自信ないなと思ったけれども、取りあえず全学校にクラス分のポスターだけ貼ってくれ、あとは自由募集だとやったら、100人集まったのです。だけれども、学校のリストを見たら、本当に大丈夫かと。この学校の子たちが来てくれるのかと疑ってかかって、慌てて事前研修をやらなければと思って、事前研修に来たら無断欠席は1人だけ。そのときはまだ、ずれパン、髪の毛は茶色、ピアスして、これを銀行に入れるとしたらどうするのだと悩んだことがあるのですね。そのときに、今までのアプローチで、あれは駄目、これは駄目という禁止をしないやり方で何とかアプローチできないかと思って、社員の人来てもらって、会社にはドレスコードがある。お客様を気持ちよくして、働いてもらうにはこうだと説明をしたら、当日みんな直っているのですよ。それが10年続いたところを見ると、自分で決めて来たというのはその子たちにとってすごく大事なことなのだと思います。本当に進路多様校のゾーンがいっぱいいて、少しそれが有名になってきて、先生が単位をやるから行ってこいと押し込んだ子はどうまくいかないという経験があります。

【笹井会長】 今の話は、子供たちの職業体験をさせるキッズニアがありますよね。キッズニアの担当者に聞くとみんな同じことを言うのです。どんな子供でも、自分でやろうと思って選択した職業はきちんと責任を持ってやるのだと。だから、そういうことの積み重ねはとても大事だなと思ったのです。

ただ、少し悲観的なことを申し上げますけれども、それを潰してしまう先生がいるのですね。だから、それを潰させないような仕組みというか、制度をつくる必要がある。

【主任社会教育主事】 逆に言うと、だから、東京都教育委員会で居場所カフェをつくるのです。そういうアプローチを、あまり良いやり方ではないかもしれないですけども、そこをある意味で堅持させておくみたいなのも一つの見せ方かなとは思っているのですね。いろいろな学校を見ていて思うけれども、先生に見える場所に設置するのも必要で、生徒が変容した様子を見て理解を示してくれる人も中には少なからずいたりする。あとは、変な話ですけども、教員の経験者でそういうのがよくできるスタッフをソーシャルワーカーに迎え入れることができたのですが、その人が入ると全然違います。その人の一言は先生たちが聞くようになる。そういう人の配置も含めて、今みたいな課題をどうしのいでい

くか。

【笹井会長】 是非、東京都教育委員会は人事権を持っているわけですから。

【主任社会教育主事】 そんなに強い人事権はないのですけれども、校長が、今の学校では続けていけないという話を聞いた途端にスカウトに行きました。退職した再任用の先生で64歳ですけれども、すごく良い活躍をしてくださっています。そういう人も配置をいろいろ考えないと、何かあったときに、若いユースソーシャルワーカーを守ってくれるみたいな人がいないと駄目で、そういうメンバー構成はこういうことをやっていくにはとても重要だというか。

【竹田委員】 追加してというか、主任社会教育主事のお話はすごくそのとおりでなと思いながらお聞きしていて、今の話で自己決定する力というのは私のウィルドアとしても掲げているところではありますので、そこは大事だと思うときに、そのためにも何も無い場所で、何もしがらみのない人からの「行ってみれば」で行ってみたい、「行こうと思うんだけど」と言われたら「いいじゃん」と言ってもらえる。その一言の力はものすごく強いと。自分で決めて自分で動けるといのは強い人だけで、大抵の人は誰かに助言を求めたくなるし、誰かに後押しされないと難しいというのはあると思いますので、ユースソーシャルワーカーの方が背中を押した部分がたくさん生まれるようなカフェになるといいだろうと、若干感想にはなりますけれども、主任社会教育主事の話聞いて思いました。

東京の良いことにはいろいろなNPOがある。最近だとNPO法人キッズドアさんなどがプログラミングスクールなど、学校の外にあるユースセンターや学習支援の方々と一緒にやっていらっしゃるのを見て、外部の人からしてもそういう場所とつながれると来る人が増えるし、それで助成金を持ってきやすくなる。外側にも資源を増やすきっかけにはなるかなと思いましたので、こういう新しい居場所カフェができて、ネットワークがつながって、そこから見えた課題が企業とタイアップされて解決され、外部のイベントが増える。このエコシステムが東京都を中心にできていくと、いろいろな社会資源が学び資源に変わっていき、課題解決につながっていく。個別最適な学びにもつながっていくみたいなことが言えると、魅力化、今回のコンセプトの学校の魅力にどうつながるかという話もあったと思いますので、そこにもつながっていくのではないかなと想像したところでした。

【笹井会長】 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。オンラインで御参加の方はいかがですか、何かありましたら。よろしいですか。

それでは、10分早いのですけれども、そろそろ時間ということで、今日の審議はこの辺にしたいと思います。こういった校内居場所カフェは、基本的には大いに結構なことだけれども、それがきちんと機能するためにはいろいろな工夫が必要だねというふうにまとめられるのではないかと思います。ありがとうございました。

それでは、事務局から今後の予定について御説明をお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】 皆様、どうもありがとうございました。

今後の予定ですが、次回の15回全体会については11月9日（木曜日）17時から、ここの第二庁舎31階、隣の部屋、26という会議室で行います。

すみません。志々田副会長には御無理を言ってリモートで参加していただくことで、申し訳ありません。

追って事務局より御連絡を改めてさせていただきますので、それを待って御対応いただけたらと思います。事務局からは以上でございます。

【笹井会長】 それでは、東京都生涯学習審議会第14回全体会をこれで終了したいと思います。皆様、御協力、ありがとうございました。

閉会：午後6時52分